# 第二講　論説　哲学

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

## 思想的なパラドックス効果の実験室

きみの眼のなかの塵こそはこの上ない拡大鏡の役目をしているのだ。

右の文は、*1テオドール・W・アドルノの『ミニマ・モラリア』に見いだされる断章である。これは、新約聖書マタイ伝第七章三にある「なぜ、兄弟の眼にある塵を見ながら、自分の眼にある梁を認めないのか」という一節をふまえながら、そこにアドルノ独特のひねりをかけたものだ。

これは一見、謎めいた一文にみえるかもしれない。アドルノ的「ひねり」の意図を深読みすると、こうした警句も、またアドルノの哲学全体も、まるで一種の神秘思想のように見えてくるだろう。けれどもこれはもしかすると、かれの読者たちはとても謎が好きだ、ということを反映しているだけかもしれない。

たしかにアドルノの哲学はその悲観的かつ救済的な側面ばかり強調されることが多い。けれどもかれの哲学的文体には、周知の名言にわざと逆説や否定による変形を仕掛けてみて、そこからどんな効果が出てくるかを実験しているような、無邪気な側面がある。それはちょうど、『モナリザ』に髭を描く*2マルセル・デュシャンのようなものである。

哲学であれ美術であれ、こうした無邪気ないたずらと深刻な現実否認とが表裏一体になっていること――これが文学や芸術における二〇世紀の新傾向、つまり「*3アヴァンギャルド」のスタイルの本質的特徴であると言えるだろう。

アドルノの著作中でも、とりわけこの『ミニマ・モラリア』という作品は、思想的なパラドックス効果の実験室ともいえるものだ。右に引用した一節のすぐ後に、しばしば引用される「全体は非真理である」という一句が登場する。

これはヘーゲルの『精神現象学』にみられる「真理は全体である」という命題を逆転かつ否定したものである。けれどもそれ

は、ヘーゲル的な観念論に対する単純なアンチテーゼではない。「全体は非真理」であるという文は、それが「真理は全体である」という文をふまえている以上、そのオリジナルと対等の資格で反対の主張をしているのではない。
アヴァンギャルド的な転倒の手法は、権威をもつオリジナルに単純に反逆したりそれを揶揄（やゆ）したりするものではなく、むしろオリジナルをきわめて真剣に受けとることから出発し、そのことによって、オリジナルの中に潜在している別な可能性を展開してしまう点にある。そこにアヴァンギャルド的メッセージの衝撃力がある。

## 「啓蒙（けいもう）」のレトリック

さて、冒頭に引用した文に戻ってみよう。この場合のオリジナル、つまり福音書の記述はいったい何を言っているのだろうか。「なぜ、兄弟の眼にある塵を見ながら、自分の眼にある梁を認めないのか」。素朴に道徳的な解釈をするなら、この聖書の一節は、自分のことをたなにあげて人を批判することの非を戒（いまし）めるものとして読めるだろう。

あなたの眼は先入観や固定観念のために曇っている、だからわたしがそれを取り去って、よく見えるようにしてあげよう――こうしたお節介な口調は、現代のわれわれにはきわめてなじみの深いものだろう。それは「こんな良い商品を知らないあなたは損をしている」と言うコマーシャリズムの中にも、「世界はこんな大変なことになってるのにあなたは何をしているのか」と詰め寄る新興宗教や慈善運動の勧誘の口ぶりの中にも、また社会悪を告発すると称するジャーナリズムの「真相暴露」や、「あなたは知らないが今のトレンドはこうなのだ」と教えてくれるマスコミの言説の中にも聴くことができる。そしてわれわれ自身も、「社会」や「人々」に向かって何かを言おうとすると、しらずしらずのうちにそうした話し方になってしまっている。

どうしてそんなことになってしまうのか。それは「兄弟の眼にある塵を見る」ことが、近代的意識そのもののあり方に深く関わっているからだろう。

迷妄（めいもう）の打破は、「近代」が「過去」を断罪するときに利用する一般的な言い方、つまり「啓蒙」のレトリックに属している。過去の人々は宗教的*4ドグマや迷信のために曇らされてきた。わたしがそれを取り除いて、世界のありのままの姿を見せてあげよう、というわけである。

二〇世紀においては、かつて「偶像破壊」の旗印であった古典的な啓蒙思想が、かつての宗教的権威にかわって決別すべきド

グマの役割を負わせられることになる。すなわち、デカルト的な心身二元論からの脱却とか、カント的理性主義の克服というふうにである。近代思想とは、過去を否定するこうしたパワーによって進展してきた。

そのことを一概に悪いとか間違っているとか言うことはできない。ただ確かなことは、本当に透徹した近代意識は、過去を悪者あるいは無知蒙昧（むちもうまい）な存在に仕立て上げたことに対して、実は深い後ろめたさをも同時に感じてきたことである。

「自分の眼には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの眼から塵を取らせてください、と言えようか。偽善者よ、まず自分の眼から梁を取りのけるがよい」（マタイ伝第七章四～五）。

啓蒙と進歩の意識の背後には、つねにこうした声が響いている。伝統を批判する自分の眼こそ、本当は手に負えない先入観にとらわれているのではないか――こうした良心の呵責（かしゃく）を考えに入れなければ、近代思想を本当の意味で理解することはできない。

## 判断というものの本質

さて、最初に引用したアドルノの断章は、聖書の言葉に奇妙な変形を加える。すなわちそのオリジナルでは「塵」は第三者（「兄弟」）のものであるのに、それが「きみ」つまり読者のものとされている。

だがより重要な点は、それが「眼にある」ということの持つ認識論的な意味を強調しながら、道徳的な意味を奇妙な形でずらしてしまうことである。「塵」とはそもそも取り除くべき障害などではなくて、それこそがよりよく見ることを可能にしている条件なのではないか、というのだ。

そしてさらに興味深いのは、こうしたアドルノによる変形を理解した後で聖書のテクストに戻ると、それがまったく別な認識論的洞察として読めてしまうことである。

あなたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたが量るそのはかりで、自分も量り与えられるであろう（マタイ伝第七章二）。

判断は自分にはね返ってくる、つまりわれわれは対象を判断したつもりでも、実は自分自身を判断したことになる、というのである。これは「だから他人をむやみに判断してはいけない」といった道徳的教訓を越えて、判断というものの本質に触れては

いないだろうか。

それは、判断はその本性からして反射＝反省的であるということである。他者を見る眼には、自分とは何者かということが含まれている。神ならぬ有限な存在者である人間にとって、判断から「自己」という要因を消去することは不可能なのである。

（吉岡洋『〈思想〉の現在形』による）

注

＊1　テオドール・W・アドルノ＝ドイツの哲学者。（一九〇三～一九六九）
＊2　マルセル・デュシャン＝フランス（後に渡米）の美術家。『モナリザ』に髭を書き加えた作品『L.H.O.O.Q.』や、レディ・メイドと呼ばれる既製品をオブジェとして提示した作品で知られる。（一八八七～一九六八）
＊3　アヴァンギャルド＝前衛的な芸術運動。
＊4　ドグマ＝教義。

問1　「「アヴァンギャルド」のスタイルの本質的特徴」とはどのようなものか。最も適当なものを選択肢から一つ選びなさい。

a　『モナリザ』に髭を描くマルセル・デュシャンのように、権威のあるものにささやかな変形を加えて、既存の権威を揶揄するという特徴。
b　『モナリザ』に髭を描くマルセル・デュシャンのように、一般人になじみ深いものにささやかな変形を加えて、日常世界と芸術世界の連続性を示すという特徴。
c　『モナリザ』に髭を描くマルセル・デュシャンのように、周知のものにささやかな変形を加えて、既存のものの見方とは別の、新しい解釈の可能性を示すという特徴。
d　『モナリザ』に髭を描くマルセル・デュシャンのように、美の象徴とされるものにささやかな変形を加えて、美とは何かを問いただすという特徴。
e　『モナリザ』に髭を描くマルセル・デュシャンのように、古典として評価の定まったものにささやかな変形を加えて、その評価の上に現代的な意味を付加するという特徴。

問2　「啓蒙」のレトリックによって意図される表現効果の例として、最も適当なものを選択肢から一つ選びなさい。

a　「こんな良い商品を知らないあなたは損をしている」と言うコマーシャリズムのように、人々の不明を断じて新しい商品に関する知識を与えることにより、人々の購買欲を誘う。

b　「世界はこんな大変なことになってるのにあなたは何をしているのか」と詰め寄る新興宗教や慈善運動の勧誘のように、世の中の問題点を誇張して伝えることにより、人々の宗教への不信感をかき立てる。

c　社会悪を告発すると称するジャーナリズムの「真相暴露」のように、社会の暗部を明らかにする報道を行うことにより、人々のジャーナリズムに対する嫌悪感をあおる。

d　「あなたは知らないが今のトレンドはこうなのだ」と教えてくれるマスコミの言説のように、世の中の流行に関する人々の情報の欠落を埋めることにより、人々の流行に対する反抗心を促す。

e　「社会」や「人々」に向かって何かを言おうとするときに、社会のかかえるさまざまな問題や人々の迷いを誇張して指摘することにより、人々の社会問題に対する無関心を生み出す。

問3　近代的意識のあり方を、筆者はどのように捉えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選びなさい。

a　過去の人々が宗教的ドグマや迷信にとらわれてきたことを断罪する一方で、デカルト的な心身二元論やカント的理性主義をも否定し、常に思想的な進歩を続けている。

b　迷妄の打破という「啓蒙」のレトリックを用いて「過去」を断罪する一方で、同じレトリックで自身が否定されることをも念頭に置いている。

c　迷妄の打破という「啓蒙」のレトリックを用いて「過去」を断罪する一方で、アヴァンギャルド的な転倒の手法で、オリジナルの価値を確認しながら、その中に潜在している別な可能性を展開する。

d　デカルト的な心身二元論やカント的理性主義を否定する一方で、アヴァンギャルド的な転倒の手法で、オリジナルの価値を確認しながら、その中に潜在している別な可能性を展開する。

e　デカルト的な心身二元論やカント的理性主義を否定する一方で、それに代わる新しい思想を展開することに困難を感

じている。

問４　「きみの眼のなかの塵こそはこの上ない拡大鏡の役目をしているのだ。」というアドルノの断章は、オリジナルの聖書の一節をどのように変形したものとなっていると筆者は捉えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選びなさい。

ａ　オリジナルの聖書の一節では、「塵」は「兄弟」のものであるのに、アドルノの断章では、それが「きみ」のものとされており、第三者への批判を戒め自分自身への反省を促すものとなっている。

ｂ　オリジナルの聖書の一節では、「塵」は「兄弟」のものであるのに、アドルノの断章では、それが「きみ」のものとされており、読者を直接啓蒙するものとなっている。

ｃ　オリジナルの聖書の一節では、「兄弟の眼にある塵」は「自分の眼にある梁」に比べれば認識上の問題は小さいとされているが、アドルノの断章では、「塵」であっても私たちの認識を大きく左右する条件とされている。

ｄ　オリジナルの聖書の一節では、「兄弟の眼にある塵」は「自分の眼にある梁」に比べれば認識上の問題は小さいとされているが、アドルノの断章では、「塵」こそはよりよく見ることを可能にしている条件とされている。

ｅ　オリジナルの聖書の一節では、「塵」は第三者にとっての認識上の障害であるとされているが、アドルノの断章では、それが人間一般にとっての認識上の障害であるとされている。

問５　アドルノによる変形を理解した後で聖書のテクストに戻ると、元のテクストはどのような読みが可能になると筆者は捉えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選びなさい。

ａ　「兄弟の眼にある塵」を見ている自分自身の眼に「梁」があることに気づくべきだ。すなわち、他人をむやみに判断してはいけない。

ｂ　「兄弟の眼にある塵」を見ている自分自身の眼に「梁」があることに気づくべきだ。すなわち、他人への判断には判断する者の主観が含まれている。

ｃ　「兄弟の眼にある塵」を見ている自分自身の眼に「梁」があることに気づくべきだ。すなわち、他人の欠点はよく見

えるものだ。

ｄ　「兄弟の眼にある塵」を見ている自分自身の眼に「梁」があることに気づくべきだ。すなわち、他人を批判する前に自分自身を反省しなければならない。

ｅ　「兄弟の眼にある塵」を見ている自分自身の眼に「梁」があることに気づくべきだ。すなわち、他人への判断には判断する者の独自の視点が必要だ。

問６　判断の本性は「反射＝反省的」であるというがどういうことか、五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

# 知識モノ解説

## 文学史・人物紹介

●吉岡洋＝よしおか　ひろし（一九五六〜）京都生まれ、京都大学文学部哲学科美学専攻、同大学院博士課程修了。京都大学大学院文学研究科（美学・芸術学）教授

●ヘーゲル（一七七〇〜一八三一）フルネームは、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル。理性主義の哲学の完成者と呼ばれる。主な著作『精神現象学』『法の哲学』『歴史哲学講義』。難解で有名だが良質な入門書として、『ヘーゲル・大人のなりかた』（ＮＨＫブックス・西研（にしけん）著）などがある

●ルネ・デカルト（一五九六〜一六五〇）近代哲学の父と称される一方、数学者でもあり、傭兵でもあった。主な書作『方法序説』『哲学原理』（この中に「われ思うゆえにわれあり」が出てくる）

●イマヌエル・カント（一七二四〜一八〇四）理性主義哲学の中心人物だが、理性の権能、特徴を厳格に確定しようとした著作で知られる。主な著書『純粋理性批判』『実践理性批判』『永遠平和のために』

## 語句

断章＝だんしょう→詩や文章の断片

警句＝けいく→短い形で真理を表現したことば。アフォリズム。類義語「格言（かくげん）」「金言（きんげん）」「箴言（しんげん）」。ただし「箴言」はいましめの意味が強い

梁＝はり→屋根を支える長い材木

周知＝しゅうち→広く知られていること。同義語「人口（じんこう）に膾炙（かいしゃ）」

逆説＝ぎゃくせつ→表面上の意味や一般的な考えとは反対のところに真実や真理があること。パラドックス

命題＝めいだい↓「AはBである」のような形式の言明
揶揄＝やゆ↓からかうこと。皮肉を言うこと
潜在＝せんざい↓外にあらわれず、内部に目立たずにあること。対義語「顕在（けんざい）」
啓蒙＝けいもう↓無知無学な人たちに知識を与えること。「蒙」には「愚か」「暗闇」という意味があり、そこに知恵の光を照らすのが「啓蒙」で、英語ではenlightenment
慈善＝じぜん↓困っているひとを金銭的物質的に支援すること。チャリティ。類義語「篤志（とくし）」
真相＝しんそう↓一般には明らかにされていない本当のこと。同音異義語「深層」
迷妄＝めいもう↓道理を知らないがゆえの間違いや心の迷い
レトリック＝表現法・修辞法。「人をだますような巧妙な言い回し」という悪い意味もあり、本文はこれ。この悪い意味の類義語「詭弁（きべん）」
偶像＝ぐうぞう↓仏像やマリア像のような具体的な崇拝対象。「中身や実体がないのにあがめられているもの」という意味もあり、本文はこれ
旗印＝はたじるし↓「風林火山」のような、戦の時に武士たちが掲げたもの。紋所（もんどころ）。類義語「錦（にしき）の御旗（みはた）」↓もとは「官軍の旗」の意味だが、広くは「誰も反対できないような標語」として使われる
決別＝けつべつ↓きっぱり分かれること。入試では常用外の「訣別（けつべつ）」も出る
ドグマ↓本来は宗教上の大事な意味だが、決めつけや独断や凝り固まった考えという意味で使われることが多い
心身二元論＝しんしんにげんろん↓心と身体は別の実体との考え方。とくにフランスの哲学者、ルネ・デカルトは心身を分けた上で心を重視した
透徹＝とうてつ↓筋がとおっていて曖昧なところがいっさいないこと
無知蒙昧＝むちもうまい↓知識がまるっきりないこと
呵責＝かしゃく↓強く責任を感じて苦しむこと

認識論＝にんしきろん→人間がものごとを理解する仕方を明らかにしようとする哲学。人間の存在のあり方を明らかにしようとする哲学が「存在論」

# 復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）学業に真ケンに取り組む　①験　②険　③検　④剣　⑤賢

（イ）物理的なショウ撃を受ける　①衝　②焦　③憧　④症　⑤翔

（ウ）社会奉仕やジ善活動に励む　①事　②次　③治　④磁　⑤慈

（エ）新入生を部活にカン誘する　①監　②勧　③環　④閑　⑤管

（オ）事件の容疑者をコク発する　①酷　②国　③穀　④刻　⑤告

（カ）隠れた真ソウを調査する　①相　②装　③層　④荘　⑤操

（キ）家庭の内情を暴ロする　①炉　②路　③露　④賂　⑤呂

（ク）そう一ガイには言えない　①該　②慨　③害　④概　⑤外

（ケ）貧困から脱キャクする　①脚　②客　③却　④隔　⑤格

（コ）対象へのドウ察が鋭い　①道　②洞　③胴　④導　⑤銅

# 第二講　模範解答

問1　c

問2　a

問3　b

問4　d

問5　b

問6　人間が他者を判断する時、判断から「自己」は消去できないため、自分自身を判断することになるということ。

# 復習問題　第二講　模範解答

（ア）④　（イ）①　（ウ）⑤　（エ）②　（オ）⑤
（カ）①　（キ）③　（ク）④　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）真剣　（イ）衝撃　（ウ）慈善　（エ）勧誘　（オ）告発
（カ）真相　（キ）暴露　（ク）一概　（ケ）脱却　（コ）洞察